

山寺通信 6 月号

今回は、常滑焼の急須が現在の形になった経緯を書いてみます。歴史的に見れば、急須は三重県の万古焼が生産量、知名度で一番でした。万古焼は、現在の四日市万古だけでなく、桑名万古や射和(いざわ-松阪)万古さらにその様式は日本の各地に広がっていきました。1873年、四日市港が近代的に改修されて東海道の要所になり、経済が発展した四日市に集約されていきました。日本のティーポットは、横手と上手が中心になっています。手と口を別々に作り、接着して組み立てます。四日市の初期の製法は、手捻りか木型を使い作っていました。中でも森有節の作った木型は複雑で独特な物でした。四日市では、粘りがあり、焼きしまりやすく、扱いやすい地元の白土を使っていましたが、その白土が枯渇し始めたので茶器の産業を延命するために、残っていた赤土で作れる技法を探しました。しかし赤土は白土の様に型抜き製法には適さなかったのです。近隣の色々な製法を試しました。そこで白羽の矢が立ったのが、岐阜の大垣の温故焼でした。この温故焼は轆轤で作った急須であり、とても完成度の高いものでした。ただ四日市の職人は轆轤を使えなかったので、轆轤技術を習得する為に大垣に修行(3~5年)に行きました。結果従来型と違った急須ができました。明治30年には、木型造りの急須が70%、手捻り15%、轆轤成型15%でしたが、15年後の明治45年には轆轤65%、木型30%、手捻り5%の比率になりました。生産量も飛躍的に伸びて四日市に多くの工房ができたので、小売りだけの販売ではさばき切れなくなり、卸売りをする問屋ができました。貿易も始まり、生産量は伸びていくのと同時に粗悪品も増えてきたので明治18年万古陶器商工会が作られました。赤土が改良を加えられ、「紫泥」と言われるようになりました。独特の造形センスがあったので工芸品までになりました。資料「四日市万古史」

明治期に作られたティーポット



白土 木型造り 環手
右後手 友禅 切はめ 貼り付け



温故師 大雅作



米国への輸出品



木型1式部品抜き取りながら型を取る

大雅は、温故の石僊と共に四日市に工房を作って共同作業をしていた。

有節の木型は、独特なものでその製法の秘密を解明するのに時間がかかった。写真山寺撮影